

ダークツーリズム： 命の尊厳への挑戦か，鎮魂の旅か

齊尾 武郎*

フジ虎ノ門整形外科病院内科・精神科

Dark tourism: Is it a challenge to the dignity of humanity or a journey of requiescat?

Takeo Saio

Department of Internal Medicine and Psychiatry, Fuji Toranomom Orthopedic Hospital

Abstract

Background : After the Great East Japan Earthquake of 2011, tourism to the quake hit zone has been promoted. As part of this promotion, the plan to remake the destroyed Fukushima Daiichi Nuclear Power Plants as a tourist attraction of dark tourism is controversial. But the exploration of both the concept and impacts of dark tourism is still insufficient in Japan.

Method : Non-systematic, narrative review of literature concerning dark tourism.

Results : Though popular definitions of dark tourism are value neutral, dark tourism has serious ethical issues such as commodification of death while it has moralistic significance to respect sanctity of life. With the terror management theory (TMT) of sociopscho-thanatological perspective, dark tourism has a potential to provoke adoration of death paradoxically.

Conclusions : Though Janus-faced dark tourism might soften the resistance to the military affair or terroristic activity, we should not hesitate promoting dark tourism to enlighten the lay people on the ethical dimensions of humanity.

Key words

thanatology, memento mori, dual usage of death education

Rinsho Hyoka (Clinical Evaluation). 2017 ; 45 : 395-402.

* K&S産業精神保健コンサルティング (K&S Consulting Office for Occupational Mental Health)

1. はじめに：被災地ツーリズムから 福島第一原発観光地化計画へ

2011年3月の東日本大震災の後、東北地方への「復興ツアー」という被災地ツーリズムが盛んに推進されている¹⁾。しかし、被災地を見学に行くことが復興支援であるとは、なかなか直感的には理解できない。むしろ、筆者が1995年1月、阪神淡路大震災直後に被災地に「医療支援」に行ったときの体験を考えると、ライフラインの寸断された被災地に対して、災害支援に関する十分な経験を持つ人員を組織的に投入するのではない限り、現地の限られた資源を支援者が消費してしまったり、二次災害を生じたりして、却って救援や復興の妨げになると思う。確かに「復興ツアー」で被災地への見学者が災害に対する認識を深め、あるいは被災地に多少の経済的な貢献をする可能性は否定できない。だが、それならば、被災地の要望や計画に応じて、ボランティアに駆けつけたり、寄付をしたりするほうが合理的なのではないだろうか。被災地を物見遊山に見歩くことは、現地で苦勞して生活している人たちが亡くなった方々に対して、あまりにも失礼（いや、あえてもう一歩踏み込んでいうならば、無神経で残酷）なのではないか。当時筆者はそのように考えていた。

ところが、2012年秋に、新進気鋭の作家・思想家（東浩紀氏）や社会的影響力のあるジャーナリスト・メディアアクティヴィスト（津田大介氏）たちが中心となって、福島第一原子力発電所（原発）を観光地として整備することで被災地の復興につなげようと、「福島第一原発観光地化計画」²⁾という大胆な提案を行い、広く議論が喚起された。これは1986年に大事故の起きたチェルノブイリ原発およびその近郊への見学ツアー³⁾が現在行われていることにヒントを得たもので、福島原発を将来的に観光地にすることで、一般市民が原発や被災地に対する過度の恐怖・偏見を持たないようにしたり、災害の記憶が風化したりするのを防いだりするという意図を持つものであった⁴⁾。

そして、その理論的支柱として、観光学のキーワードである「ダークツーリズム」(dark tourism)があった。

東日本大震災の被災地ツーリズムは不謹慎なことなのか、それとも被災地の人たちの想いや生活の様子を直接知ることができ、現地への経済効果もあり復興に有用で、一般市民の災害に対する認識を広めたり深めたりするのにも役立つのか。そのことを考えてゆくためには、ダークツーリズムを巡る学術的議論を知る必要がある。また、これは筆者の専門の一つである生命倫理的にも、チャレンジングな概念であった。すなわち、我々は修学旅行や観光で、日常的に戦跡や自然災害の起きた場所やそれらに関連する資料館（こうした場所を総称して、ダークサイトという）を見学する。そこは多くの人が不慮の死・非業の死を遂げた場所であり、本来は見学するに沈鬱でつらいところだ。しかし、見学者たちは必ずしも犠牲者たちに敬虔な祈りを捧げるわけでもなく、観光ルートの一部として、あるいは、名所旧跡として、自らの生を顧みることもなく、深い感慨を抱くことなく、短時間見学し、そこを通り過ぎる（筆者は、多くの犠牲者を出した国内の有名な戦跡で、少なからぬ見学者たちが帽子を被ったままアイスクリームを食べつつ漫然と祈念碑を眺めていたり、近くの土産物屋で髑髏マークの付いた土産物を店頭で販売していたり、あるいは戦跡に心無い落書きがあったりすることに驚いた）。事件・事故・災害が起きた場所を訪ね歩いたとして、それで人間というものは、他者の心身の痛みをどこまで忖度し、過去の悲痛な出来事を自らの教訓とすることができるのだろうか。それが遠い過去に生きた人の苦難であれば、なおのこと、その痛みを追体験することは難しい。筆者はダークツーリズムを、災害や事件の犠牲となった生命に対する個人や社会の道徳性に関する問題を提起する重要な概念であると考え、第25回日本生命倫理学会（2013年11月30日、東京大学）の公募シンポジウム「ダークツーリズム：命の尊厳への挑戦か、鎮魂の旅か」を企画・開催した。本稿はその際の筆者の発表

「ダークツーリズムとは何か」をもとに加筆・修正し、まとめたものである。

2. ダークツーリズムとは

2.1 定義・類語・近縁概念

人の死に関連した場所を訪れることは、決して新しい現象ではない。人は昔から、家族や知人、著名人の亡くなった場所や墓地に行き、花を手向け、鎮魂の祈りを捧げてきた。しかし、無名の群衆の事故や災害による終焉の地を、亡くなった人たちは直接の関係がなく、特段の思想的・宗教的背景もない個人や集団が見学に行く現象は、明らかに前世紀後半の通信交通の発達によるものである。こうして1990年代後半、この現象にもようやく学問的（主に観光学、歴史学）な光が当たるようになった。Table 1に、ダークツーリズムの学術的定義のうち、他の文献にしばしば引用されるものを列挙した。いまだダークツーリズムに関する広くコンセンサスを得た確定的な定義がない⁵⁾ ままに、ダークツーリズムは諸氏によりさまざまに論じられている。いずれにせよ、ダークツーリズムは人間という存在の暗闇の部分、生きることの辛さ、といったことをテーマにした展示

や陰惨な事件の起きた場所を探訪する活動を指すものである。

日本では、広島大学総合科学部Carolyn Funck助教授（当時）の2007年、日本地理科学会秋季学術大会シンポジウム（「知識・学習」と地理学）での発表¹²⁾ が初めてダークツーリズムを紹介したものとされ、学習観光としてダークツーリズムを位置づけ、“知識自体が観光資源となり、地域が観光者の学ぶ場所”であるとしている。

しかし、世間にこの概念が広く知れ渡ったのは、先に述べた2012年秋からの東浩紀氏・津田大介氏らによる「福島第一原発観光地化計画」の提唱・普及活動による（ダークツーリズムという言葉は、「現代用語の基礎知識」選2013年ユーキャン新語・流行語大賞ノミネート50語のひとつとなった）。彼らを学術的に支えたのが、追手門学院大学の観光学者・井出明准教授であり、氏はダークツーリズムの特徴として、「この新しい観光の考え方は、戦争や自然災害の跡を観光資源（tourism attraction）として捉え、そこを訪問することで悲しみを共有し、死者を悼む営為である」ことを挙げている¹³⁾。

被災地の復興をダークツーリズムの目的に掲げるならば、筆者はむしろ、ダークツーリズムとい

Table 1 Definitions of dark tourism and its synonymy

<p>定義</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実際の、もしくは商業化された死と災害の現場の展示や（訪問者による）消費を含む現象（Foley&Lennonの定義）⁶⁾。 ● 悲劇や歴史的に注目すべき死が起き、我々の生活に影響を与え続けている場所を訪問すること（Tarlowの定義）⁷⁾。 ● 死、苦悩、もしくは不気味さと関連する場所に旅行する行動（Stoneの定義）⁸⁾。
<p>類義語・近縁概念</p> <p>black spot tourism, grief tourism, thanatourism, tragic tourism, negative sightseeing, morbid tourism, disaster tourism, atrocity tourism, phoenix tourism, vulture tourism, milking the macabre, fright tourism, doomsday tourism, poverty tourism, slum tourism, horror tourism, hardship tourism, tragedy tourism, warfare tourism, battlefield tourism, war tourism, genocide tourism, Holocaust tourism, prison tourism, cemetery tourism, ghost tourism, suicide tourism, slavery heritage tourism, nuclear tourism, holidays in hell, thana-capitalism</p>
<p>ダークツーリズムの対象地・対象物に関する用語</p> <p>dark site, dark tourism attraction (DTA), traumascapes, uncomfortable heritage site (UHS), difficult heritage, negative heritage</p>

文献9⁹⁾, 10¹⁰⁾, 11¹¹⁾を参考に筆者にて作成

う言葉を使うよりも、被災地ツーリズムのスローガンとしては、「壊滅的な打撃を受け、廃墟となった場所が不死鳥の如く蘇る」という意味で、Table 1に掲げた類義語・近縁概念の中の「不死鳥ツーリズム」「phoenix tourism」という言葉を使うほうが、納まりが良いと思う。しかし、不死鳥ツーリズムは、「政治的紛争に直接巻き込まれた人々や地域の社会的調和と都市の復活の過程であり、その過程の中の主たる要素にそうした場所を訪問することによる観光促進を含むもの」¹⁴⁾であり、原義では、自然災害の被災地の復興を目指すものではなく、地域紛争・戦争後の復興のための観光である。

2.2 ダークツーリズムの分類と負の世界遺産

ダークツーリズムには、さまざまな分類がある。各論文中でしばしば紹介される代表的なものとして、ダークサイトの性質によって区分したStoneの7分類⁸⁾やDannの5分類¹¹⁾、旅行者の目的によって区分したSeatonの5分類¹⁵⁾がある。いずれも、戦争や事件に関連するもので、自然災害への観点には乏しい。いっぽう、日本では、井出の7分類¹⁶⁾があり、日本における自然災害から公害・原子力災害、人権抑圧、経済の衰退などにまで視線を広げた優れた分類である。

Table 2に国際連合教育科学文化機関 (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organisation : UNESCO) の世界遺産の中にあるダーク

サイトの例を一部挙げる (ただし、UNESCO自身は「負の遺産」というものを定義してはいないし、事物の評価は同じ対象であっても、政治的な要素・立場によって様々であることを注意する必要がある)。

3. ダークツーリズムの問題点と意義

Table 3にダークツーリズムの問題点をまとめた。ダークツーリズムは本質的に人間・人類の暗黒面を扱うものなので、他人の不幸を見世物にしているという非難はある。また、過去の事件の意味を現代に生きる者がいったいどこまで、その正価を見極められるのか、あるいは、過去の問題を現代の文脈で読み解いて良いのか、といった問題もあるだろう。

さらに、例えば、Maritime Mercantile City (英国リバプール) のように、UNESCOの世界遺産としては18～19世紀に海運で栄えた大英帝国の輝かしい象徴として登録されているのだが、一方でここは奴隷貿易の拠点というダークサイトでもあり、政治的な観点により、遺産の意味づけが大きく変わってしまう。また、負の遺産として位置づけられることがスティグマとなるなど、ダークサイトを抱える地域の苦悩が増す可能性もある¹⁸⁾。そして、ダークサイトは少なからず、廃墟や古戦場など、保存状態が悪かったり、事件の痕跡が失われてしまったりしており、事情を知らな

Table 2 Examples of negative sites in the World Heritages, UNESCO¹⁷⁾

場所	負の出来事
Robben Island (南アフリカ)	アパルトヘイト政策
Hiroshima Peace Memorial (日本)	原爆
Island of Gorée (セネガル)	奴隷貿易の拠点
Bikini Atoll Nuclear Test Site (マーシャル諸島)	原爆実験
Auschwitz Birkenau (ポーランド)	絶滅収容所
Forts and Castles, Volta, Greater Accra, Central and Western Regions (ガーナ)	奴隷貿易の拠点となった要塞群
Ruins of Kilwa Kisiwani and Ruins of Songo Mnara (タンザニア)	牢獄の遺跡
Old Bridge Area of the Old City of Mostar (ボスニア・ヘルツェゴビナ)	民族・宗教的紛争で破壊された橋

Table 3 Controversies over dark tourism

倫理・道徳的問題：人の死の商品化という批判
メディア・宣伝の問題：ダークサイトが商業的な宣伝活動により広まることの是非，正しくない内容が喧伝されるリスク
解釈・政治的問題：歴史的な意味づけが（政治的に）変わってしまう可能性
管理・運営上の問題：よく事件・事故の意味を理解した上でダークサイトが運営されるか
社会文化的・死生学的問題：ダークサイトを地域が抱えることの辛さ
●「かのような了解」：ダークサイトで苦難を経験した人たちの心情を見学者が「分かったつもり」になることの危険性
●遺物・風化：ダークサイトは廃墟が多く，展示物は古く，記念碑の文字も読みにくい
●神秘性を失う：死という聖なるものを見世物にしてしまい，俗なるものに貶めてしまう
●フラッシュバック：ダークサイトへの訪問が，被災者が災害や事件を思い出すきっかけとなり，心的トラウマが被災者を苦しめる可能性がある ¹⁹⁾
●ヤサスの顔：逆説的にも，ダークツーリズムが死への順応性・賞賛を高めてしまう（本稿末尾で詳述）

文献20²⁰⁾を参考に筆者にて作成。●の項目は筆者が（独自に）考えたもの。

いものにとっては，瓦礫にしか見えない遺物・遺跡もある。祈念碑の碑文・説明文があったとしても難読であったり，歴史的な背景知識がなければ，その意義が汲み取れなかったりする。あるいは，ダークサイトの展示が生々しい場合，被災者が訪問した時に，フラッシュバックを生じる可能性もあるかもしれない。

次にダークツーリズムの倫理的意義だが，ダークツーリズムは，日々の生活では意識しない，いや，あえて意識しないようにしている，あるいは社会の中で制度的に見せられないようにされている自身の限りある生（「見えない死」）を思い出す（memento mori）きっかけとなる。それはまた，自分が小さな存在であり，より大きな存在—それは霊性とか，超自然的なものと言えるかもしれない—を感じることで，倫理的・道徳的な生き方を選ぶことや社会人としての自覚にもつながるかもしれない。こうした見学者個人の生き方に根本的な影響を与えるポテンシャルをダークツーリズムは持つのである（Table 4）。

木村利人氏は日本におけるバイオエシックスの向かうべき方向性として，ダークツーリズムを「計り知ることの出来ないほどの人間の暗黒面に焦点を当てた上記で指摘したような場所（筆者注：

ダークサイトを指す），跡地，遺跡への訪問と現地での追悼・慰霊等を通し，その耐え難い悲惨の中でも光り輝いた人間への希望を共感するツアー」と定義した²¹⁾。木村氏はバイオエシックスは「人間性の回復」のためのcivic actionであると論じており，「人間の絶望的な心の弱点と残虐性の深みを自覚するとともに，その一方での希望ある人間の未来を展望したい」という願いをダークツーリズム概念に寄せている。これは生命倫理学が，人間の欲望や残虐性，尊厳を奪われた存在などを直視し，社会的弱者の権利を確立する志向性を持つ学問であることによるのであろう。

Table 4 Ethical value of dark tourism

経験として：自分の存在を見直すきっかけとなる
共同作業として：他者との意識の共有・一体感
自らの生を見つめるために：死の疑似体験
非日常を経験する：特別な体験をする
鎮魂：敬虔な気持ちで祈りを捧げる
レジリエンス：災害の経験を心理的に乗り越えていくきっかけになる ²²⁾

文献9を参考に筆者にて作成。

4. ダークツーリズム：最近の動き

ダークツーリズムは最近登場した概念であるため、いまだ百家争鳴である。ここでは、ダークツーリズムとして取り上げられることの少ない(しかし、広義のダークツーリズムの対象である)、生死を巡るいくつかの展示を紹介する(Table 5)。いずれも日本で最近行われたものばかりである。これらを解剖学的な冷めた眼差しであるとか、人間が生身の肉体を持つ存在であることを思い知らされるとか、さまざまなポジティブに受け止める意見があるだろう。いっぽうでやはり、気味が悪い、悪趣味だ、といったネガティブな感想もあるだろう。筆者自身は、こうした展示は人間の生死の本質を抉り出す勇氣ある試みだとは思いつつ、これに魅入られてしまっただけではいけないと思う。つまり、あくまでも知的な考察対象として見るべきであり、美醜を感じようとしてこれらを眺め続けられれば、自分の中の闇の心性が呼び起こされるような気がする。

5. おわりに：ヤヌスの顔

ダークツーリズムの対象は、医療では救済しえなかった多くの人の不慮の死であり、医療ではいかんともしがたい大災害である。あるいは、医学が悪用された結果の死もある。医師としてダークツーリズムを振り返る時、医学・医療はどれほど人の幸福に寄与してきたか、ニヒリステックな気持ちになる。人間はいつかは死すべき定め

(memento mori) であり、医学という人智では、その運命から逃れることはできないのだから、「その日をつかめ」(carpe diem) ということなのかもしれない。

これを社会心理学・死生学の恐怖管理理論(terror management theory : TMT)^{24, 25)} に倣って考えると、人間は自己保存本能を持っており、自らの将来を予測できるがゆえに、自らの死が不可避であることを認識せざるを得ず、自らの存在が空と化すことへの恐怖を抱く(存在論的恐怖(ontological terror))。この恐怖を乗り越えさせるのは、TMTによれば、文化的世界観や自尊心といった、現在の生に積極的な意味・価値を持たせる観念(文化的不安緩衝装置(cultural anxiety buffer))である。ダークツーリズムをこの観点から読み解くと、ダークツーリズムにより、1) 死に関する文化的観点を社会と共有することができる、2) そのような世界観の共有ができる自分というものに自信を持つことができる、3) 死への実存的恐怖を危険な行為で乗り越えようとする傾向(自分は怖いもの知らずの強い人間であるという認識を持つとうとして危険な行為をしてしまう)の代償となって危険な行為をしなくて済む、ということになる²⁶⁾。これは裏を返せば、TMTの基本的理論のひとつ、死の顕現(mortality salience : MS) 仮説によれば、ダークツーリズムによって死に関する文化的観点や自尊心を持った者は、そうした死に関する価値観を共有しない者を排斥したり、却って殉死や軍事を正当化したりする可能性を帯びているということでもある²⁷⁾。このように、TMTからは、ダークツーリズムが死の恐怖を乗り越えさせ、人間に慎み深く充実した生と社会や世界との連帯感を育ませる反面、ダークツーリズムの価値を認めない者や人間の死が予測不可能で不可避であることに想いを寄せない者に対する嫌悪感や排外的姿勢を醸成しかねないという、ダークツーリズムのヤヌスの顔が浮かび上がる。

ダークツーリズムについての英文の学術論文における定義は、Table 1に示した通り、価値中立的で、ダークツーリズムが娯楽であるとか、教育

Table 5 Dark tourism today

<p>人体の不思議展²³⁾：人体のプラスチックを展示するもの(海外でも問題となった)</p> <p>現代画家・会田誠の画：エログロの作品が多い</p> <p>松井冬子の日本画：幽霊、内臓、腐乱死体などを題材とした画</p>
--

的意義を持つといった意味を有さない。しかしながら、その実践においてはTable 3にまとめたような問題点が指摘されており、反面、Table 4に示したような倫理的意義を持つ。そして、本稿で指摘したように、ダークツーリズムにより、死について謙虚な想いを持つと同時に、大義のために死ぬという自己犠牲に価値を見出し、自らの帰属し、文化社会的価値観を共有する集団を死を賭して暴力的に防衛することに美を見出す可能性もあるだろう。こうしたダークツーリズムが軍事やカルトに利用される危険性を考慮したうえで、なおも、ダークツーリズムは啓蒙活動として推進されるべきであると、筆者は考える。それは、現代が「見えない死」の時代であり、死は孤独で、社会から隠されたものとなっていることを超克するためのひとつの試みだからである。今日、死を考える機会はそれほど多くはないのだから、ダークツーリズムをきっかけにゆっくりと死に思いを巡らせることが極めて重要だと思うのである。

付 記

本稿は、2013年11月30日第25回日本生命倫理学会(東 京大学) 公募シンポジウム「ダークツーリズム：命の尊 厳への挑戦か、鎮魂の旅か」における発表「ダークツー リズムとは何か」の内容を発展させたものである。

文 献

- 1) 東日本旅客鉄道株式会社. 「行くぜ、東北。2012夏」 キャンペーンを展開します。2012年6月5日。 Available from : <http://www.jreast.co.jp/press/2012/20120604.pdf>
- 2) 東 浩紀, 編. 福島第一原発観光地化計画 思想地図β vol.4-2. 東京:ゲンロン; 2013.
- 3) 東 浩紀, 編. チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド 思想地図β vol.4-1. 東京:ゲンロン; 2013.
- 4) HUFFPOST. Chika Igaya. 「2036年、フクシマが希望の言葉になる」 福島第一原発観光地化計画を立ち上げた東浩紀さんに聞く「未来のつくりかた」; 2014 Jan 3 [cited 2016 Jul 7]. Available from : http://www.huffingtonpost.jp/2014/01/02/fukushima_n_4528221.html
- 5) Stone PR. Dark tourism and significant other death: Toward a model of mortality mediation. *Ann Tourism Res.* 2012 ; 39 (3) : 1565-87.
- 6) Foley M, Lennon JJ. JFK and dark tourism: A fascination with assassination. *International Journal of Heritage Studies.* 1996 ; 2 (4) : 198-211.
- 7) Tarlow P. Dark tourism: The appealing “dark” side of tourism and more. In : Novelli M, editor. *Niche tourism: contemporary issues, trends and cases.* Oxford : Elsevier Butterworth-Heinemann ; 2005. p. 47-57.
- 8) Stone PR. A dark tourism spectrum: towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism.* 2006 ; 54 (2) : 145-60.
- 9) Sharpley R. Shedding light on dark tourism: An introduction. In : Sharpley R, Stone PR, editors. *The darker side of travel: the theory and practice of dark tourism.* Bristol : Channel view ; 2009. p. 3-22.
- 10) Fonseca AP, Seabra C, Silva C. Dark tourism: Concepts, typologies and sites. *J Tourism Res Hospitality.* 2016 ; S2-002.
- 11) Dann GMS. *The dark side of tourism.* Etudes de Rapports, Serie L. Vol.14. Aix-en Provence : Centre International de Recherches et d’Etudes Touristiques ; 1998.
- 12) Carolin F. 「学ぶ観光」と地域における知識創造. *地理科学.* 2008 ; 63 (3) : 160-73.
- 13) 井出 明. ダークツーリズム入門. *Genron etc.* 2013 ; (#7) : 46-53.
- 14) Causevic S, Lynch P. The significance of dark tourism in the process of tourism development after a long term political conflict: An issue of Northern Ireland. ASA Conference 2007: Thinking Through Tourism, London Metropolitan University, London.
- 15) Seaton AV. Guided by the dark: From thanatopsis to thanatourism. *International Journal of Heritage Studies.* 1996 ; 2 (4) : 234-44.
- 16) 井出 明. 日本におけるダークツーリズム研究の可能性. 第16回進化経済学会(大阪). 2012年3月17日. Available from : <http://jafecosaka.web.fc2.com/pdf/B5-1ide2.pdf>
- 17) UNESCO. World Heritage List [cited 2016 Jul 7]. Available from : <http://whc.unesco.org/en/list/>

- 18) 親泊素子. Dark Tourism試論:「負の遺産は観光資源になり得るか?」. 情報と社会:江戸川大学紀要. 2012; 22: 139-48.
- 19) Clark LB. Coming to Terms with Trauma Tourism. *Performance Paradigm*. 2009; 5.2: 1-31.
- 20) Stone PR. Dark tourism: Towards a new post-disciplinary research agenda. *Int J Tourism Anthropology*. 2011; 1 (3/4): 318-32.
- 21) 木村利人, 栗原千絵子, インタビュー. バイオエシックスといのちの思想—「人間の尊厳」確立に向けた市民活動—木村利人教授インタビュー. 臨床評価. 2016; 44 (2): 249-63.
- 22) Korstanje ME, Ivanov S. Tourism as a form of new psychological resilience: The inception of dark tourism. *Cultur*. 2012; 6 (4): 56-71.
- 23) Dicks S. The Guben Plastinarium: Context and categorisation in dark tourism. In: Merrill S, Schmidt L, editors. *A reader in uncomfortable heritage and dark tourism*. Cottbus: BTU Cottbus; 2010. p. 139-50.
- 24) Greenberg J, Solomon S, Pyszczynski T. Terror management theory of self-esteem and cultural world views: Empirical assessments and conceptual refinements. In: Zanna M, editor. *Advances in experimental psychology (Vol. 29)*. San Diego, CA: Academic Press; 1997. p. 61-136.
- 25) イーリヤ・ムスリン. 近年の心理学理論における死と宗教: 恐怖管理理論の批判的考察. 東京大学宗教学年報. 2010; XXVII: 87-102.
- 26) Biran A, Buda DM. Unravelling fear of death motives in dark tourism. In: Stone PR, Hartmann R, Seaton T, Sharpley R, White L, editors. *Handbook of dark tourism*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. Forthcoming [cited 2016 Jul 7]. Available from: https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=2816585
- 27) Pyszczynski T, Abdollahi A, Solomon S, Greenberg J, Cohen F, Weise D. Mortality salience, martyrdom, and military might: The great satan versus the axis of evil. *Pers Soc Psychol Bull*. 2006; 32 (4): 525-37.

* * *